
バニッシュ

tky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バニッシュ

【NZコード】

N9742D

【作者名】

t k y

【あらすじ】

未定です。どんな言い方をしても、未定です、としか言えないくらい未定です。

プロローグ（前書き）

消すかもしません。無駄にイライラすることになるかもしません。

プロローグ

ずっと昔から気付いていた。

ある程度の事を言葉で表せるようになると、もつと前から気付いていた。

なにか、具体的な出来事は、その時はまだ起こっていなかつたが、何となく感じていた。

自分はおかしいと。

そしてまた・・・

自分は危険だと。

最初に変化が起こつたのは、今から大体十年前だと、記憶を頼りに推測している。

なんでもない一日だつた。

テロがあつたわけでもなく、世間を沸かすような猟奇的な殺人があつたわけでもなく、

近くで火事があつたというわけでもなく、台風が猛威をふるつてい

たわけでもなく、

父と母が、口論することさえもなかつた。

まさしく、平和な日常そのもののよくなつた日曜日だった。

一通り母と父と祖母が家事を終えて、やっと休めることがかりし、父と母と一緒に川の字になつてお風呂をしつづけた。

幸福な日常のもののような日、とも言えるよくなつた日曜日があった。

彼は皿をつむつむしていたが、俺に気づいたみづからさあすると、

彼は皿を開けて、父を見た。

おきたのかい？

といった。

なんとか、説明するのは今の俺でも限りなく不可能に近いが、とても幸せな気分になつた。

そんな思い出なんて、普通ならば、これが、普通の日常だったのなら、即ち、忘却していただろう。

しかし、いまだに覚えている。鮮明に、まるで、その時間だけを切り取ったかのように。

それが彼との、最後の思い出になつた。

その後突然、隣に横たわっていた父は俺の目の前で、まるで蒸発するかのように、かつ、音もなく消えた。

プロローグ（後書き）

今まで10個投稿して、9個削除しました。

まあ、頑張るつもりです。

第一話

ずいぶんと、リアルな夢を見たな。

もう何度この夢見たのだろうか。

重い瞼を開ける。変わらない部屋があった。昔は、この部屋は父の書斎だった。

なのに

今は俺が使っている。

どうも本を読んでいる間に眠ってしまったようだ。

部屋のドアをあけ、トイレへと向かう。

用をたし、リビングへと赴いた。

リビングには、時計の、一秒一秒を刻む小気味のいい音だけが響いていた。俺の好きな音だ。

時計を確認する。

8時20分。

しかし

今から走れば間に合わない」とはない。

「だるい・・・」

定時に行くのはあきらめた。

俺は寝起きが悪い。

どこか、他人事のように思つた。

カーテンを開ける。曇りだつた。一筋の光さえ差し込んでこなかつた。

顔を洗う。2回顔に水をかけたあと、石鹼を泡立てて、泡を顔の隅々まで塗つたくつて、それをあらいながす。

なんでこんなことできれいになるのだろうか・・・

そう思いながら、冷凍庫に入れておいたご飯を、レンジで無理やり解凍する。

「はんは、おいしくなかつた。

これは米なのだろうか、と、一瞬疑うほどじこ。

改めて外の様子をつかがう。

雲の黒が深くなつてきていた。

雨の中、学校に行くのはさすがに面倒だ。

食べかけの、クズ飯を茶碗に入れたまま冷凍庫に突っ込み、行く準備を始める。

「折り畳み傘、折り畳み傘つと

折り畳み傘が見つからない。諦めて玄関に向かった。

靴をはき、玄関のドアを、鍵を閉めた。

お気に入りのダークグリーンの自転車にまたがる。

空の黒がさつきよつも深まってきた。

「どうやった俺のスピードと脚との、勝負になりそうだった。

ものすいじへ自然にため息が出た。

ああ、イマイチな一日になつそうだ。

第一話（後書き）

「のあとを、どうなげようか。

思考が短絡的な僕には、難しい問題です。

第一話

案の定雨が降ってきた。

折りたたみは、実験に使つてしまつたのをこのときやつと思い出した。

まあ、思い出さなかつたとしても思い出していたとしても結局傘を用意できなかつたことに変わりはない。

ずぶぬれになりながら、必死にペダルをこいだ。

漕ぐこと十分、やつと学校が見えてきた。しかし、いつもの学校とは、何やら事情が違うようだつた。

何故かパトカーがいっぱい止まつていて、なんだかゴリゴリしていた。

放送局の車が確認できるだけでも6台止まつていて、この組み合わせから、ありがちなパターンを想像した。

「殺人事件？」

呴いたところで、全然現実味が伴つていなかつた。

しかし、数人くらいはこの、小さな声を察知したらしかつた。

一人の記者のような男が話しかけてきた。

「あの、君は？」

「ただの遅刻した男子生徒です。ところでここで何があつたんですか？」

「あれ、知つてたんじゃなかつたの？君のさつきで何が言つてたように殺人事件だ。」

マジデスカ・・・

まあ

正直それ以外なんの感想もないけど・・・

「ありがとうございました」

そう言って自転車置き場に向かつ。

途中教師に見つかり、怒声を浴びせられそうになつたが（報道陣の質問に答える役回りの彼らは相当それがストレスだつたらしく、いつも見つけても放置している遅刻生徒に怒りの矛先を向けてしまつたらしい。やれやれだ。）きれいに彼の怒りの感情を消去し、無事自転車をおいた。

小走りで校舎へと向かう。

その途中で一人の教師にあつた。

わが担任だ。抜群のプロポーションを誇る整つた顔立ちの、まあ、美人とか評される類の人だ。性格もかなりきれいで、正直、タイプ

だ。俺の消したくない人ランキング10位の中には当然、入っている。

「何があつたんですか？」

一応、聞いた。

「何人殺されたんですか？」

彼女はかなり疲れた様子だった。

声かけなかつた方がよかつたかな・・・

しかし、彼女は嫌がりずに反応してくれた。

「遅刻はいけないことですよ。置々正一クン」

質問には答えず、そのまま、校門の方に行ってしまった。

まつたく・・・

いやな口になつそつだ。

耳障りに雨音が響いていた。

第一話（後書き）

相も変わらず未定ですが、どこからどう考へても未定、という状況ではなくなりました。

消さなくともよさげです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9742d/>

バニッシュ

2010年10月9日03時05分発行